

『サントリー天然水』 一定量を安定して継続的に

『サントリー天然水』は厳選された4つの水源『南アルプス』（山梨）、『北アルプス』（長野）、『奥大山』（鳥取）、『阿蘇』（熊本）で採水したナチュラルミネラルウォーターである。山や森に降る豊富な雨・雪が20年の長きにわたり磨かれた地下水だ。健康志向や備蓄意識の高まりにより、ミネラルウォーターの市場は伸長している。サントリーグループは、災害など不測の事態発生時においても、より安定した供給を行える体制の構築を目指している。

2021年に稼働したサントリー天然水 北アルプス信濃の森工場（以下 北アルプス信濃の森工場）は、省エネ推進や再生可能エネルギー導入など、環境負荷低減に取り組んでいる。採水地の長野県大町市は、3,000メートル級の山々を望む自然豊かな地域で、工場の水源涵養エリアには総面積約441haの『天然水の森』が広がっている。

「サントリーは、コーポレートメッセージ『水と生きる SUNTORY』の通り、水や農作物など自然の恵みに支えられた食品酒類総合企業です。国内工場の水源エリアで、森林と生物多様性を保全・再生する水源涵養活動を続けています。『人と自然が響きあう』社会を実現するために、私たちは自然への尊敬と感謝を忘れず、水をはじめとする自然の



サントリー天然水



安曇野配送センター



2個積み集配トラック



両サイドから積載



養生材を挟みながら閉扉する



南松本駅に向け出発する集配トラック



サントリーホールディングス 山下課長



李白さん

生態系が健全に循環するためのさまざまな活動に取り組んでいます」とサントリーホールディングス（株）物流調達部の山下副課長は語る。

北アルプス信濃の森工場では2L・1L・550mlのペットボトルを生産している。2025年1月、東北向けの鉄道コンテナ輸送が南松本駅発で始まった。

「地産地消を基本に工場から近い消費地へ届けるのが望ましいものの、採水地に建設されている工場から消費地が近いとは限りません。中長期的にも配送は重要なポイントです。特に長野から東北へは長距離輸送となり、大量のトラックを手配することは難しい。安定的な輸送力と環境負荷が小さい点を評価し、貨物鉄道輸送を重要な選択肢と考えています」と山下課長。背景にはトラック輸送力の確保が年々難しくなっていることがあるという。



サントリーロジスティクス 蛭名部長



井上リーダー

同物流調達部の^{すえし}季白修真さんは「生産拠点の立地や出荷先の分布を踏まえ、トラック・鉄道など各輸送モードの特性を生かした最適な物流体制を構築しています。BCPの観点から輸送手段は複数確保しておくことが大切であり、かつ一定量を安定して継続的に輸送できることを重視しています。特に長距離は、ドライバー不足への対応と環境負荷低減の両面から貨物鉄道の活用を推進しています。今回も消費地への安定供給を実現するため、鉄道への大規模なシフトを検討・実行しました」と話した。

北アルプス信濃の森工場と南松本駅の中ほどに安曇野配送センター（鴻池運輸（株）が運営）がある。商品をいったん入庫し、方面別に発送する物流拠点だ。5月現在、12ftコンテナで日発32個を出荷しており、利用運送事業者の岡谷運輸（株）は2個積みコンテナ集配トラックや大型トラックで対応している。

サントリーグループの物流を担うサントリーロジスティクス（株）営業部の蛭名保明部長は「今回、モーダルシフトを決断できた最大の決め手は、盛岡・仙台・郡山の3カ所へ安定的かつ継続的な輸送力を確保できたことです。加えて、JR貨物さんと関係事業者の調整力、とりわけ発駅である南松本駅の岡谷運輸さんの対応力も安心して任せられる要素でした」と評価する。

同営業部内航・鉄道Gの井上肇リーダーは「12ftコンテナ単位を前提とした輸送を、3カ月単位で計画しています。安曇野配送センターへの入場時間は予約制なので、それに合わせて配車計画を組み立ててもらいます。繁忙期には利用個数を増やすなど、岡谷運輸さんやJR貨物さんと緊密の需要差に応じた調整をします」と説明した。

酒類・飲料業界で広く流通しているのがビール9型プラスチックパレット（900×1,100mm）である。荷役作業においては、養生材を適宜挟む「標準の積み付け」を定

めて作業担当者に周知しており、12ftコンテナに積み付けて発送を行っている。

配送センターの滞留時間削減も共同で

サントリーでは「以前から、トラックを待たせる荷主は選べなくなるとの危機感を持ち、荷待ち時間・荷役時間の短縮に取り組んできました。トラックの受付から荷を積み込んで出発するまでをいかに早くできるか、倉庫の構え方から見直しています」。特に安曇野配送センターでは、滞留時間削減を目的とした持ち込みスキームなど、現場改善につながる取り組みを共同で進めているという。

蛭名部長は「JR貨物さんや利用運送事業者とは、日常的に連携しながら運用しています。ドライバー不足という構造的な社会課題を踏まえ、輸送方面の拡大や利用量の増加についても随時検討しており、状況に応じて柔軟に対応していく方針です。私たちは大量の製品を運んでいますので、輸送効率・品質の良い31ftコンテナも利用したいと考えています。31ftコンテナは往復利用が前提ですので、他社とのラウンド輸送などJR貨物さんと一緒に可能性を探っていきたい」と展望した。

続けて「計画通りに物流を回せる点を貨物鉄道輸送の大きな価値だと感じています。環境負荷低減という点でも高く評価しています。トラック同様、コンテナも片荷になりがちなので、ラウンドユースなどにより輸送効率を上げることも物流の責務として取り組んでいきたいと考えています」と結んだ。

サントリー天然水 北アルプス信濃の森工場・サントリー天然水 南アルプス白州工場で生産する東北向け『サントリー天然水』の約8割は、鉄道・船へモーダルシフトをしている。



左から 岡谷運輸南松本駅営業所の藤澤所長・藤澤社長、サントリーロジスティクスの井上リーダー・蛭名部長、サントリーホールディングスの李白さん・山下課長、JR貨物南東京支店青木副支店長